慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	高貴なる野蛮人 : 教養人としての羽田功先生
Sub Title	"Noble savage" : professor Isao Hada and "liberal arts"
Author	横山, 千晶(Yokoyama, Chiaki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.58 (2019.) ,p.193- 212
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	羽田功教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Isao Hada 退職記念に寄せて = Zu Ehren Prof. Isao Hada
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20190331-0193

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高貴なる野蛮人
――教養人としての羽田功先生――

横　山　千　晶

はじめに

Noble Savage という言葉がある。そのまま訳すと「高貴なる野蛮人」。いかにも植民地の拡大に血眼になっていたヨーロッパ人たちの優越感と罪悪感を体現したような言葉であるが，要するに人為的に押し付けられた「教養」はなくとも，ありのままで品性と道義に適った人格，および肉体能力を備える未開人を理想の姿としてとらえた言葉である。

この言葉を羽田功先生に冠するのはふさわしくないことは百も承知だが，なぜかしら，その歴史的な背景は抜きにして，あらためて羽田先生のことを考えるとすぐに頭の中に浮かんできた言葉が Noble Savage だったのだから仕方ない。私にとっての羽田先生は教養と浩瀚な知識を身に着けておられるくせに，どうもバンカラで人情に篤い。アングラや暗黒舞踏を愛し，武芸もたしなんでいる。誰よりも早く舞踏を日吉キャンパスに通う 1，2 年生の前に突き付け，その真価を学生たちに問うたのも羽田先生である。先生を通して，慶應義塾大学と舞踏が出会ったあと，舞踏は今も HAPP（日吉行事企画委員会）の重要なイベントとして，慶應義塾大学の春の景色のなくてはならないひと夜を彩る。

失礼を顧みずに言うと，羽田先生は十分に「野蛮」なのだ。またそれが先生の魅力でもあり，身に着けてきた教養をしっかり支えている。

この短いエッセイの中では，そんな羽田先生から筆者とその周りの人々が受け取った数多くのものはとても書ききれない。しかし，個人的な経験も踏まえて，Noble Savage としての羽田功先生を振り返ってみたいと思う。

1．教養教育研究会――「知」のグランド・デザイン

1–1　ミレニアムを迎えて教養教育を考える

羽田功先生と筆者の出会いは，かれこれもう 20 年近く前になる。ちょうど 2000 年のミレニアムの年に向けて大学教育が見直される時期で，今後のファカルティの在り方，研究と教育および大学運営のワーク・バランスなど，各教育機関がそれぞれのアイデンティティの再確立をかけて大いに議論していた頃である。

慶應義塾大学も例外ではない。湘南藤沢キャンパスは設立 10 周年を迎え，新たに看護医療学部の設立が準備されていた。各キャンパスでは今後の教育カリキュラムについて話し合われるのみならず，キャンパス間の交流を含めた義塾の在り方をめぐる研究会が，大学主導，あるいは自主的な集まりとして開催され，30 代だった筆者もそれらの刺激的な会のメンバーとして末席を汚すことになった。ちょうど日吉に新しい研究室棟となる来往舎が建てられる前のことでもあり，キャンパスや学部を超えた教職員の意思疎通の在り方と，そのためのインフラ整備も，熱心なディスカッションのテーマとなった。

ご存知の通り，慶應義塾大学は学部自治が強い。そんな環境の中で，教員・職員の職種の違い，職位の違い，そして学部や専門の違いといった垣根がすっかり取り払われて，自由闊達な話し合いが続けられた。そんな喧噪の中で静かに求心力を発揮していたのが羽田功先生だった。

羽田先生よりあらためて連絡をもらったのは，1999 年の秋のことだったろうか。文部科学省より慶應義塾大学に，大学における新たな教養教育のモデル構築を目指す研究が委託されたのである。こうして羽田先生を座

長として教養教育研究会が発足し，先生の指揮のもと慶應義塾大学を中心に，東京大学，武蔵工業大学など，東京都内の大学のみならず，北海道大学，関西学院大学，京都大学，国立博物館などで，教養教育の行く末をめぐってオピニオン・リーダーとして活躍する教育者／研究者たちが，メンバーとして参集した。こんな中に知識も経験もない若輩者が混じってよいものだろうか，という危惧よりも好奇心のほうが勝っていたのは，おそらくそれまでの数年間，慶應義塾大学の中での開放的な討論のただなかに身を置かせていただいたおかげである。

最初の会合は2001年1月13日に丸の内シティキャンパスで開催された。しかし，いかにも羽田先生の指揮らしく，2回目からは，合宿会議で週末をつぶしての話し合いとなった。メンバーとゲストスピーカーによる講演や話題提供を経て，徹底的に討論しあう，という形式は，今までの大学内での会議や話し合いでも，個人的には経験したことがないもので，実に新鮮だった。食事の時も話は尽きない（もちろんお酒が入るとますます舌鋒滑らかで鋭くなる）。朝食の席でも討論が続く。メンバーの体力と探究心にはまったく驚くばかりだった。

1–2 「知」に肉付けをする

研究会を通して学んだことは多々ある。まず，23人のメンバーを支えてくれた慶應義塾大学運営サービスのメンバーと慶應義塾大学出版会からのオブザーバーの存在である。教職員一体で時間を過ごしたことは，義塾という組織を知るまたとない機会となった。教育を実際に動かすのは運営組織である。そして知を外に発信するために，慶應義塾には出版会がある。この歯車がかみ合って，初めて「教養」は動き出す。羽田先生はこの三者一体をはじめから念頭に置いていた。「知」は頭だけで考えた空中楼閣ではない。その青写真を「建築」として構築するためには，各部署の協力が必要となる。そして教育をめぐる既存の規則や枠組みというものは，時代と共に変えることができる，のではない。時代と共に変えていかなくては

ならない，と教えてくれたのもこの研究会だった。

続いて研究は心身を伴って動いてこそ，ものになる，ということを学んだ。研究会は各メンバーの属する研究機関に赴いてフィールドワークを兼ねた会合を開催することもあったし，海外の大学視察も積極的に行った。筆者は2001年の夏に，学会で訪れたエジンバラ大学で視察を行わせていただき，教員と学事のメンバー数名にインタビューを行った。エジンバラ大学では「教育」「研究」「アドミニストレーション」の3本の柱にかかわることが昇任の条件である。もちろん年によってエフォートレベルの配分は異なってくる。これは今でこそ日本でもごく普通になった考えだが，あらためて高等教育機関に職を得ている人間のアイデンティティについて考えさせられた。

最後にこの研究会が他機関との交流のみならず，学部自治の強い慶應義塾大学内での交流をも促してくれたことは大きい。研究会では，「教養」をいくつかの分野に分けてワーキング・グループが作られた。筆者は近藤明彦先生（体育研究所）がグループ長を務める「身体知グループ」に属して研究を行った。ここでの活動と意見交換が，その後の筆者の教員生活に徹底的な影響を与えることになる。一緒に研究を進めた佐藤望先生（商学部）と熊倉敬聡先生（当時理工学部）との出会いと活動は，それまで書かれた言葉を中心に教育を行ってきた筆者の考えを根底から覆した。「知」とは「言葉」とは，書かれたものの蓄積ではない。そこにはからだが伴い，心が通う。身体を通じて身に着けた知はまさに各自の肉となり血となる。あまりに使い古された言説であるとはいえ，そのことを教育カリキュラムの中で実行している仲間に初めて出会ったのだった。アメリカの大学で身体を通した言語教育を経験してきた筆者は，ほそぼそと，ドラマメソッドを自分の言語教育に取り入れてはいたものの，その意義と効用について裏打ちとなるサポートを与えてもらったのである。同時に教育のみならず，大学という限られた箱を中心に運営が進んでいく場所と空間のバリアそのものに問いかける身体知は，高等教育の中では未開発の分野だった。

1-3 教養教育研究会が与えてくれたもの——知のネットワーク

そしてなんといってもこの研究会は知のネットワークというかけがえのない宝を，まだ駆け出しの研究者であり未熟な教育者である筆者に与えてくれた。研究会のメンバーのひとりである数学研究者の上野健爾先生（現在京都大学名誉教授）との出会いは，初等教育での数学教育の重要性について教えてくれた。数学教育とは単なる黒板上での計算を教えることではない。それこそ，「腑に落ちる」身体的な経験を与えることなのである。また音楽の造詣が深く自らも演奏家であられる上野先生からは，あらためて生活の中での数学について教わった。私が取り組んでいるドラマメソッドにいち早く興味を持ってくださったのも上野先生であった。すぐに先生は，ご自身が設立者のひとりでもある日本総合学習学会に招いてくださった。先生は，算数教育を始め，すべての教育の根幹は初等教育から始まるとの考えから，小学校からの諸教育校の先生方との交流を大切にされていたのである。先生のもとでは，当学会で数回のドラマワークショップを行わせていただいた。上野先生もそのおひとりだが，もっと前にこの人たちから学んでいたら，筆者の数学嫌いは変わっていただろうと思うような数多くの先生方に出会った。皆研究者でありながら，教育者だった。

上野先生のもとに集まるたくさんの先生方との出会いが新たなネットワークを形作り，今でもその交流は続いている。多摩市の小学校に呼ばれて，初等教育への英語教育導入に伴う身体知的なメソッドを念頭に置いたワークショップも何度か開催させていただいた。また，ここ数年は倉敷市の高校に呼ばれ，大学での授業の一端を高校生とシェアする一日講義を京都大学や東京大学の先生方ともども持たせていただいているが，高校生の感性の鋭さに驚かされる経験を何度も味わっている。高校生からもらった意見をそのまま大学に持ち帰り，自らの授業に活かすまたとないチャンスを得ることができるので，筆者にとっても高校での講義は非常に貴重な体験となっている。

同じく教養教育研究会のメンバーであった物理学者，小沼通二先生（慶

應義塾大学名誉教授，当時武蔵工業大学教授）との出会いも，筆者に全く新しい視点を与えてくれた。すべての学問と研究の根底は，他者と共に生きることであることを教えてくれたのは小沼先生である。研究は個人の倫理観や生き方と切っても切り離すことはできない。湯川秀樹の弟子として日本のサイエンスをけん引してきた小沼先生は，学問領域を超えた活躍をなさっているのみならず，オピニオン・リーダーとしてその時々の政情や社会体制にも厳しいまなざしを向けてこられた。教育者としては，社会の隅々にまでその目を行き届かせている。教養教育研究会が終了した後も，先生のお話を聞く機会は何度もあり，その思想と人格は筆者の倫理観を支えるひとつの指針となっている。今も，日本の学生のみならず海外における教育支援を行っている先生に学ぶところは大きい。

羽田功先生を通してこのようなロールモデルに数多く出会えたことは，大学人としての筆者の大きな糧となってきた。しかもすでに 18 年がたった今でも，それらの大先輩たちとつながっていることの幸せは何ものにも代えがたい。羽田先生の確かな目に感謝せずにはおれないのである。

2. 教養研究センターの設立と羽田功先生——共同・実験・実践

2–1 教養研究センターの設立

教養教育研究会の活動は 2 年間続いた。成果として作られたグランド・デザインは，報告書として公にされたのみならず，2002 年 9 月 29 日には慶應義塾大学で成果発表のシンポジウムが開催され，多くのレスポンスを得ることができた。これらの成果は各メンバーが自らの高等教育・研究機関に持ちかえって，実行に移され，慶應義塾大学では 2002 年 7 月に設立された教養研究センターの土台となった。センターの初代所長は羽田功先生である。

名称が示す通り，教養研究センターはより広くこの時代の必要とする教養とは何か，ということを真っ向から見据える研究および実践機関である。専属の所員や教員，研究者はいない。このセンターは各学部や研究センタ

ーからメンバーが集まるボランタリーな組織であり，研究の成果を試金石にかけるワークショップ兼実験場であった。

2–2 実験授業の立ち上げ――「アカデミック・スキルズ」

グランド・デザインで提示されたカリキュラム・モデルは，まず実験授業として教養研究センターのもとで開講され，その成果を分析して効果が認められたものは，学部から単位認定を受ける正規授業とすることが目指された。実践と研究の両輪が回されただけでなく，その成果は次世代の育成につなげられていったのである。この試みの中から「アカデミック・スキルズ」（2004 年正規科目化），「身体知」（2010 年正規科目化），そして最近では「日吉学」（2019 年正規科目化）などいくつかの成果が授業化されて今に至っている。

これらの実験は，教養研究センター設置に尽力くださった故湯川武先生（商学部）を通じて，極東証券株式会社の寄付を受けたことによって可能となった。羽田先生の指揮のもと寄付講座として「教養とは何か――よりよく生きるために」が開所後真っ先に開講された。そして翌年の秋には実験授業「スタディ・スキルズ」が開講される。

リサーチから発信に至る学問の基礎を身に着けることを目標とした「スタディ・スキルズ」は，様々な大学ですでに開講されていた。しかし，教養研究センターの「スタディ・スキルズ」が他大学の「スタディ・スキルズ」と一線を画していたのは，そのユニークな構成にある。様々な講師を招いて行われた講座「教養とは何か」は，実験授業「スタディ・スキルズ」の開講と同時に「生命の教養学」として生まれ変わった。そのタイトル通り，この授業は「生命」というひとつのテーマを，人文科学，自然科学などの学問領域を横断して様々な側面から考察するというオムニバス形式の講義である。これまでに扱われたテーマは「感染」，「食べる」，「性」，「異形」，「進化」など非常に多岐にわたり，現在に至っている。毎年およそ 100 名の履修者を集める人気講義だが，授業の最後には必ず講師との

質疑応答の時間を設け，双方向の講座を目指している。

実験授業「スタディ・スキルズ」は，この講義とタイアップした徹底的な少人数教育を行うことから始まった。大人数のオムニバス講義は，専門の異なる領域の講師が語るということで横のつながりを欠き，また一回一回が独立した内容ということで縦のつながりを欠くことが往々にしてあるが，「生命の教養学」の運営は大学内の専門の異なる教員たちによって構成された運営委員会メンバーによって行われる。これらのメンバーたちも授業に参加しながら，各回のつながりを学生に意識させる役割を担う。

「スタディ・スキルズ」の履修者はこの「生命の教養学」を履修することが前提となった（のちに正規授業化とこま数の増加に伴い，「生命の教養学」からは独立する）。こちらは 1 クラス 20 名という少人数の演習で，講義で学んだことを自分たち自身でリサーチし，論文やプレゼンテーションとして発信することが求められる。実験授業当時から意図的に組み込まれたもうひとつの大きな特徴は，この 20 名という学部や学年を超えた学生を，専門の異なる 3 名から 4 名の教師がチームとなって指導するという点である。このような形式の「スタディ・スキルズ」は慶應のみならず，国内の他大学でも例を見ないものだった。

この贅沢なクラス体制には重要な目的がある。この授業から学ぶのは決して学生だけではない。教養教育研究会のグランド・デザインには「協同・共同・協働」という基礎があった。教員・職員・学生は知を血肉化する上でともに同志であり，同士である。単位にもならない実験に学生たちは喜んで参加し，その内容を教員と共同で考察する。そしてそこに職員も加わることで，どのようにして新しい形式の授業を立ち上げていくのか，というプロセスを考えていく。つまり教養研究センターの実験授業は学生のみならず，教員と職員の教育の場でもあった。

「スタディ・スキルズ」は，このファカルティ・デヴェロップメントをさらに一歩推し進めたモデルだった。ひとつの授業に専門も学部も異なる教員が複数かかわるということは，タコツボに陥りがちな教員たちにとっ

ても大きな刺激であり，学びの場となる，ということである。学問のディシプリンが異なれば，テーマの見方も大きく変わってくるし，論の展開やリサーチのメソッドも異なってくる。時々授業中，テーマをめぐる見解の違いから教員同士が激しく討論を始めることがある。筆者自身も何度も経験したこのぶつかり合いは，学生にとって，ワクワクする時間を提供するのみならず，問いの答えはひとつではないし，そこにたどり着く道筋も一本ではないことを目の当たりに提示することになった。この「カオス」もまた，羽田先生を中心にした初期のセンター・メンバーが仕組んだものだった。この授業を経験した教員たちは，それぞれ身に着けたリサーチの視点と教育メソッドを自分たちの学部や研究の現場に持ち帰り，新しい形の少人数クラスを展開していった。

こうして学生とファカルティに大きな成果をもたらした実験授業「スタディ・スキルズ」は 2004 年に「アカデミック・スキルズ」の名称で正規授業化された。筆者はこの年の秋から，羽田先生の後を継いで 2 代目の教養研究センター所長を務めさせていただくことになったが，そのころには様々な大学が独自の「スタディ・スキルズ」や「アカデミック・スキルズ」のクラス構築を模索していた。国内の他大学のみならず，韓国からも多くの大学が，慶應義塾の「アカデミック・スキルズ」の視察や，内容に関するインタビューに訪れたことは今でも記憶に新しい。こちらからも韓国の様々な大学を訪れ，交流を深めた。ときに視察に訪れた他大学の教員が「アカデミック・スキルズ」に参加して，担当教員に負けない辛口の批評で，学生たちを鼓舞してくれたこともあった。

3.「教養」の意味——伝承と創造

3–1　慶應義塾の知の継承を考える
——基盤研究「慶應義塾大学のカリキュラム研究」

羽田先生のもうひとつの理念は，時代の要請する教養は，変化を促しつつも，人類が文化を築いてきた当初から脈々と現在につながっているとい

う思考である。つまり受け継がれてきたものは自らの時代性を付与しつつ継承し次世代に伝え，時代の要請に従うのみならず，その先を読み込んで必要な教養を生み出していく，ということだった。一方で古典教育を重要視しつつ，新しい教養，つまり未来の古典を高等教育機関で生み出していくというスタンスである。そのためにもカリキュラムの中に基盤となるものと，常に生まれ変わっていくものを共存させるフレクシビリティが，羽田先生の考える教養の特徴だった。学問は死んだものではない。それは継承され，生きながらえ，育ち続ける。教養教育研究会ではその「教養」のふたつの側面が重要視された。

その方法をセンターのメンバーたちも共に模索し続けてきた。慶應義塾そのものも，「知」を生み出し継承するという伝統があってこそ成り立ってきた組織である。教養研究センターはまずはその伝統を徹底的に見直すことから研究を始めた。羽田先生が所長のころより，慶應義塾大学のカリキュラム研究のグループが立ちあがり，今までは学部縦割りの中で見えてこなかった慶應の知の伝承の在り方を，それぞれの学部から集まったメンバーたちで議論した。羽田先生の所長時代には，外国語教育，自然科学系科目，そして少人数科目を対象にそれぞれ研究がすすめられ，筆者が2代目の所長になった時に，慶應義塾大学のカリキュラムを研究し，提言を行うことを目標とした基盤研究「慶應義塾大学のカリキュラム研究」の研究会が設立された。中心となったのは，商学部の佐藤望先生，そして経済学部の伊藤行雄先生（現在名誉教授）である。2004年から2014年度にかけて行われてきた「カリキュラム研究」で取り上げられてきたテーマは，「学部共通総合教育科目」，「学期制の見直し」，「学事日程」と多岐にわたる。ここでは教員と職員が共同で研究を進めるのみならず，国際基督教大学（ICU）など，他大学のカリキュラムとの比較研究も積極的に行われ，多くの講師を他大学から招いて，ティーチインを行った。研究の成果はシンポジウムとして公開し，内容と制度の面から義塾が目指す次のカリキュラムが模索された。この10年間の研究とディスカッションと発信は，慶

應義塾大学のカリキュラムの見直しと新しい構築に大きな影響を与えることになった。

3-2 新たな知の構築――「身体知プロジェクト」

もちろんこの知の構築は，慶應義塾から外へと広がっていくものでもある。もうひとつのセンターの基盤研究は，今まであまり考察されてこなかった新たな知の構築に焦点があてられた。それが基盤研究「身体知プロジェクト」だった。

教養教育研究会の中で建てられた新しい教養の柱のひとつが，この「身体知」であったことは先にも述べた。知は「腑に落ちて」こそ，ものになる。頭のみならず身体と心で理解するための方策を，教養研究センターは，引き続き研究していくことになった。教養教育研究会の身体知グループのメンバーだった熊倉敬聡先生をリーダーとして，身体知研究会が発足されたのは，2005 年のことである。「身体知グループ」のリーダーだった近藤明彦先生にも引き続き研究会を支えてもらいながら，当時国際センターで異文化コミュニケーションを教えていらした手塚千鶴子先生（現在名誉教授）と法学部の武藤浩史先生にも主要メンバーになってもらった。こうして大学職員，一貫校の教員たちの参加者を交えて，1 年間の研究を続けた。

そして翌年の 2006 年からは実験授業を立ち上げた。かかわった人々は学生や研究会のメンバーだけではなく，アーティストや他大学の教員，ひいては教養教育研究会のネットワークを通じて知り合った慶應義塾以外の諸学校の先生方である。瞑想，コラージュ，絵，ダンス，物語からドラマを作る，など様々なテーマで実験授業を行った。その後実験授業は平日の夕方のみならず，武藤浩史先生のもとで，夏休みを使っての集中講座としても開講された。こちらは身体を使ったワークショップを使いながら文学作品を読み込むというものである。この夏の講座には夏期スクーリングで学んでいる通信教育課程の学生たちも参加してくれた。こうして学部や学年，通学形態を超えた学生・複数の教職員からなる参加者は，ロジェ・カ

イヨワのいうところの「遊び」に楽しみながら真剣に取り組むことになる。ワークショップには数多くのアーティストたちが関与してくれた。特に2016年に亡くなられたコンテンポラリーダンスのゴッド・マザー，黒沢美香氏は，2005年5月の新入生歓迎行事でパフォーマンスを行ってくれた際に学生対象のワークショップを開催したことがきっかけで，その後病気で亡くなるまでの11年間，身体知プロジェクトをはじめとし，教養研究センターの様々な活動に協力してくれることになった。

これも大変個人的なことになって恐縮だが，羽田先生，近藤先生，熊倉先生が身体知というものを筆者に提示してくださったことは，自分にとっての過去からの伝統を意識する機会ともなった。身体論者の市川浩は筆者の従兄伯父にあたる。『〈身〉の構造』（1984年）など，市川の著作を知ってはいたものの，筆者は身体知を研究することになって初めて真剣に彼の言説に向き合うことになった。図らずも2015年7月に安全保障関連法案の強行採決が行われる際に，筆者は市川の父である大叔父の市川白弦の著作も読むことになる。白弦は禅師として，戦時中，自ら身を置いていた禅の社会倫理責任を弾劾し追及した人物であったことをあらためて強く意識したのも，学問と政治倫理の関係に2015年の夏に対峙させられたからであった。新しいことを追っていくと自然と過去に同じことを考えていた人々の存在に気付く。身体知の研究に始まる一連の活動は，筆者に伝統と創造は表裏一体であることを教えてくれた。

3-3　庄内に学ぶ「生命」――心と体と頭と

伝統と創造が出会う今ひとつの身体知教育の結晶は，羽田先生が2008年に始めた「庄内セミナー」である（詳しくは小磯勝人氏のエッセイを参照されたい）。「庄内に学ぶ『生命』――心と体と頭と」という基本テーマが語るように，このセミナーは感動を伴う体験とフィールドワーク，そしてリサーチを通して伝統と創造の現場に出会うセミナーである。

教養教育研究会が発足した2000年に山形県の鶴岡市には鶴岡タウンキ

ャンパスが設立されている。慶應義塾大学が世界に誇る先端生命科学研究所はこのキャンパスに居を構えた。鶴岡を中心とした山形県庄内地方は，このような最先端の科学技術を率先して受け入れていく進取の気質を備え，日本の歴史を支えてきた種々の伝統，そして豊かな自然に恵まれている。伝統と創造を，身体を通して学ぶにはうってつけの場所である。

この庄内セミナーの準備段階から筆者は羽田先生に伴走させていただいた。この時ほど羽田先生の「高貴な野蛮さ」に触れたときはない。まず先生は庄内地方の歴史と自然を机上で学ぶのみならず，人に会い，体を通して土地を知ることからゆっくりと準備を始めた。

庄内の文化を育てた山岳信仰を知る必要があると，数年にわたって，7月にはセミナーの運営委員会の教職員メンバーで出羽三山（羽黒山，月山，湯殿山）と鳥海山を制覇していった。鳥海山は羽田先生，筆者，そして2010年の秋から第3代目の教養研究センターの所長となられた不破有理先生（経済学部）の3代にわたる所長たち全員でのぼったのだが，日ごろから鍛えているせいだろう。とにかく羽田先生は健脚である。こちらがもたもたしているとあっという間に先を行ってしまう。どの登山の時も筆者は見事に置き去りにされて，毎回獅子の子落としの気分を味わったものだ。

もちろん苦しいことばかりではない。地元の食材を求めて味わった。人と会ってじっくりと話を聞いた。一度準備のために庄内を訪れた時に，地元の杜氏の集まりに呼ばれたことがある。土地の食材やお酒の話など，話題は尽きず，私たちは皆，熱心に聞き入っていた。随分お酒もまわっていたと思うが，そろそろ帰ろうというときも，話の花はまだしぼむ気配がない。タクシーを呼んでもらって一度外に出たものの，そこで羽田先生は「俺はやっぱり残る」と言って扉の向こうに消えていったことを覚えている。とことん人と付き合うのが羽田先生の主義だった。

現在この庄内セミナーの資金は，教養研究センターの経常費の中に組み込まれており，センターの基幹事業のひとつとなっている。そして参加し

て戻ってきた多くの学生たちにとって，庄内は第二の故郷となっている。

4. バリアフリーの学びの場

教養研究センターでは，教養教育研究会で培った骨組みに肉付けを行っていったが，その舞台裏でも忘れられない思い出がたくさんある。まず会議の形式である。会議の場もまた身体と心を最大限に使う試みだったと思う。熊倉先生を中心に 2006 年に設立された「三田の家」は，キャンパス外キャンパス（インター・キャンパス）として，町の一軒家が大学とコミュニティをつなぐ場所となった。三田キャンパスから歩いて 5 分の町中キャンパスである。かかわる教員たちは曜日ごとに「マスター」となって，ここで授業を開講し，地元の人々も学生に交じって参加した。

もちろんこの「三田の家」を使って教養研究センターの行事も何度も開かれた。筆者にとって忘れられない会議のひとつは，「三田の家」が開いた同年に開催された，「未来の大学を考える」話し合いである。大きな模造紙のロールを持ち込んで，それを部屋いっぱいに広げると，各自が自分の思い描く理想の高等教育機関について次々とマインドマップを描いていく。これは，私たちが「アカデミック・スキルズ」や「庄内セミナー」でも使う方法であるが，まさにそのブレインストーミング法を使って皆の考えを大きな紙いっぱいに展開していった。ほぼ一日かけてこのマインドマップを整理していった末に，羽田先生を中心にしてまとめ上げた未来のキャンパスを語るキーワードは，「バリアフリー」だった。

おそらく未来のキャンパスは，性別，ジェンダー，性的指向や年齢や国籍という社会制度上のカテゴリーを超えた，開かれた学びの場となっていくことだろう。それはもちろん少子高齢化や延びゆく平均寿命，そして進むグローバル化などを見越してのことであるが，実は私たちが抱えるより大きな「バリア」は，教育現場にいる私たち自身を縛る固定観念である。それを少しずつ壊して新たな発想へと現場そのものが自らを開いていかなくてはならない。「バリアフリー」とは決して社会的包摂の一部をなすキ

ャンパス環境に求められるものだけではない（もちろん大学という場所が包摂的な場所を目指すことは，最も重要な目標である）。教育を担っている（と思い込んでいる）人々が今一度自分の中のバリアと向き合い，それを壊すということでもある。

今まで見てきたように，手始めに私たちが開始した破壊行動は自分たちの属する学部という「バリア」を破ることだった。教養研究センターの開所そのものがバリアを壊す試みであったが，「アカデミック・スキルズ」や「慶應義塾大学のカリキュラム研究」の立ち上げのプロセスでも多くのバリアが壊された。センターの開所によってはじめて，教員は学部というバリアを壊せなくとも超えて話し合う場所，あるいはバリアにつける扉を見つけた。教員・職員・学生（通学生と通信生）という役割を超えて同じ目標に向かうことができた。

同時に実験授業が正規科目化されるには，学部への働きかけが必要になる。異なる学部の教員が「アカデミック・スキルズ」の講師として参加することを可能にするためにも，学部の理解が必要だった。教養研究センターの講座は特に若い講師たちに積極的に参加・協力してもらうことを目指している。講師たちが他学部の教員たちと知り合う機会となり，また先輩たちの教え方を学ぶ場所となるからである。この利点を根気強く説明することで，各学部における単位化と講師たちの協力を徐々に得ることができている。アーティストなど，大学外の専門家の協力を得ることができたのも，HAPP などのプロジェクトとの協力体制があったからである。すべては地道な運動の成果だった。

2006 年の「三田の家」での話し合いからすでに 12 年がたった。しかし「バリア」の存在を意識し，乗り越える方法を模索することは，多様性を標榜する 2018 年の現在こそ必要な課題となりつつある。自分の内外の「バリア」から自由になることは，教養であるどころか，他者と共存するための必須条件となっていくことだろう。

5. 他者の存在を想うこと，他者とともに生きること

5–1 「身体知教育を通して行う教養言語力育成」プログラムの開始

2009 年，教養研究センターの事業「身体知教育を通して行う教養言語力育成」は，文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】に採択された。大学における座学中心の教育を補完するものとして，フィールド・アクティヴィティや芸術表現などの非言語的な表現ツールを取り入れた「身体知」の意義を評価し，それらを通して高度な学術言語・教養言語による発信につなげる教育システムの構築を目標としたこの事業は，今までの身体知の研究と実績を土台としている。今回も羽田先生は研究メンバーとして活動に参加してくださった。

人と会う，現場に赴く，そこで起こっていることの背景を研究する。研究者と対象物・対象者という立場を超えて相手の懐に飛び込んでいく。このような羽田先生の教養には，体も心も頭も総動員でかかわっていたが，そうして得た研究成果を教育の現場に移すとき，先生が常に考えていたことは，知を次世代に継承するということは受け継ぐ学生にとってどのような利益があるのか，そして提供する側に誠心誠意の覚悟と度量があるのか，ということだった。

身体知を通した学びの場としてのオルタナティヴ・スペースの構築が，センターで進んでいたことはすでに述べた。あらゆる人々に開かれた場所を設け，学生が他者とともに過ごすことで，より時間をかけて体験し，記録し，そして記憶することを可能にする「インター・キャンパス」の創造である。2006 年に大学の三田キャンパス近くに「三田の家」が設立され（2013 年 10 月に閉所），そこでの知見を活かして 2008 年には港区の委託事業として「芝の家」が「三田の家」の近隣に開かれていた。

2010 年に慶應義塾大学の日吉キャンパスが位置する横浜市の中区に開設された「カドベヤ」は，そのような成果を土台としており，「身体知教育を通して行う教養言語力育成」事業の社会連携プロジェクトのひとつと

して運営されることになった。ご存知のように，中区には，高度成長期の日本を支えた日雇い労働者向けの簡易宿泊施設が立ち並ぶ地区，「寿」がある。現在，これらの簡易宿泊施設は，生活保護受給者の終の棲家となり，寿地区は福祉の町となっている。この寿地区に，フィールドワークとして一時的に入るだけではなく，「居場所」を設け，町の人々との交流を通じて，時間をかけて人と町の歴史を体感するプロジェクトが，カドベヤを拠点とした，この「寿プロジェクト」だった。

準備は 2009 年に「身体知教育を通して行う教養言語力育成」が採択されると同時に始まった。まず横浜市のアドバイスを受けて，すでに寿地区で社会起業家として活動しているコトラボ合同会社を紹介してもらった。その後，会社代表の岡部友彦氏の協力を得て，居場所の選定と設営，運営，そしてかかわる学生の教育を行うと同時に，地元で，ホームレスの方々や生活保護受給者の自立支援を行っている認定 NPO 法人「さなぎ達」(2018 年解散）が運営する「みまもりボランティアプログラム」に参加することで，学生たちが寿地区の住民たちと交流を図るという教育プログラムが構築された。

こうして 2010 年の 4 月にはオルタナティヴ・スペース「カドベヤ」が，寿地区のある中区と隣の南区（この南区でも生活保護世帯が増えつつある）の境目に設立された。ここを拠点，および居場所として教育プログラムと社会連携プログラムが開催されることになった。

社会連携プログラムとしては，学生と地元の人々が交流するツールとして，身体知の研究と実験授業に参加してくれたアーティストたちの協力を得て，一週間に数回「動く教室」を開催することにした。ここでは参加者同士の関係性を築くきっかけとして，「身体ワークショップ」と「ともに食べる」というふたつの活動を用意した。ワークショップでは，会話がなくとも場と時間の共有が起こり，非言語的なコミュニケーションが生まれる。そののちにともに夕食を楽しむことで，自然と会話が生まれ，交流が促されると仮定された。

5–2　他者を想い，準備に準備を重ねること――居場所「カドベヤ」

今まで様々なカリキュラムが立ち上がるのを温かく見守ってくれていた羽田先生が，厳しい提言をしたのは，「カドベヤ」の開設に伴い，この新しい形のフィールドワークに基づいた教育プロジェクトがいよいよ実行に移される時だった。もちろん羽田先生は横浜の明るい歴史のみならず，日雇い労働や生活保護の現実など暗い歴史にも通暁していた。その意識があるからこそ少し前まで暴力がはびこり，今でも暴力団が拠点を構えているこの福祉の町に学生たちを連れていく，というプロジェクトの実施に羽田先生は，「まだ準備が足りないのではないか」「学生の身の安全を考えているのか」というまっとうな意見をぶつけてきたのである。ひとつのプロジェクトを発進させるためにとことん研究し，現場に赴き人々と話し合ってきた羽田先生だからこその批判だった。

しかしこの提言は，筆者と，共同でプロジェクトを立ち上げた法学部の武藤浩史先生に，さらなる研究と準備の機会を与えてくれることになった。大学の学生部からは似たようなボランティア活動の状況と動向を教示してもらった。看護医療学部の教員たちに，学生たちを対象とする「高齢化社会」と「グリーフケア」をめぐる講義を用意してもらった。中区の警察署に出向いて，この土地についての話を詳しく聞くと同時に，寿地区にある交番にも紹介してもらった。コトラボ合同会社と「さなぎ達」の協力で，リスクマネジメント・ルールを強化した。もちろん中区や南区をはじめ，いくつかの区役所の保護課を訪問し，生活保護の状況について学ぶと同時に，大阪の釜ヶ崎で長年アートを使った地域活動を展開しているNPO法人「こえとことばの部屋　ココルーム」の代表者，上田假奈代氏や「さなぎ達」の理事長をお呼びしてのティーチインも開催した。それだけではない。国内の他大学の社会連携・地域貢献のプログラムや，様々な福祉事業の聞き取りを実施し活動に参加した。また芸術活動の福祉への応用やコミュニティアートの分野では嚆矢であるイギリスへ赴いて，リサーチとフィールドワークを行った。国内のフィールドワークには，居場所の活動に参

加してもらうアーティストたちにも同行してもらった。その結果，聞き取りや調査の時にお世話になった研究者や関係者たちが，その後居場所としての「カドベヤ」の運営にもアドバイザーとしてかかわってくれるようになった。

カドベヤの教育プログラムは，2012 年の春に「身体知教育を通した教養言語力育成」事業が終了すると同時に，教養研究センターの傘下を離れたが，居場所の運営はセンターの社会連携プログラムの一環として，数々の支援を受けてきた。また，2012 年 5 月から，住民によるアートプロジェクトの創造を助成する横浜市の事業「横浜アートサイト（横浜市地域文化サポート事業，のちに「ヨコハマアートサイト」と改名）」に参加することで，横浜という場所での居場所の役割を探ることになった。このアートサイトでは，ほかの採択事業との交流の機会も設けられており，そこでの人的交流を，カドベヤの運営のみならず，義塾の教育プログラムに活かすことも可能になっている。

現在居場所は「カドベヤで過ごす火曜日」の名のもとに毎週火曜日にその扉を，誰でも訪れた人たちに開いている。「ワークショップ」と「ともに食べる」という 2 本柱は今も変わらず，学生たちも運営に参加してくれている。

奇しくも，2019 年 3 月末をもって，居場所「カドベヤで過ごす火曜日」は，社会連携プログラムとしても教養研究センターを卒業することになった。準備期間を入れるとまさに 10 年目である。いろいろなことがあった。最高の笑顔に出会った。大切な参加者を突然，死が，犯罪が奪った。あらためて，社会の偏見や法律の壁の存在に気付かされた。家族とは，血のつながりとは何かについて考えさせられた。貧しさとは何か，豊かさとは何か，わからなくなった。暴力よりも強いものは，きちんと伝えることであることも身をもって知った。それは言葉とは限らない。言葉を超えて伝えるものが私たちの体には備わっている。それを教えてくれるのは，他者の存在だ。この場所が与えてくれる悲しみと喜びは大きい。

「カドベヤ」は地域に根付いた居場所として，今後この場所を必要とする人々によって支えられていくことになる。他者とともに生きていく場所となる。大学という垣根を越えて，かかわる学生のことを大学のみならず，コミュニティの人々が見守るという現行のシステムが出来上がったのも，あのときの羽田先生のまなざしがあったからである。羽田先生とともに教養研究センターを「カドベヤ」が卒業することになるのは，偶然とも思えない。

6. おわりに――再び「野蛮」であること

こうやって書き始めると羽田先生から教わったことの多さにただ驚くばかりであり，冒頭で述べたようにどこで終えてよいのかがわからなくなる。そしてやはりたどり着くのは，「高貴な野蛮さ」なのだ。教養とはよりよく生きる術である。先が見えない社会を生き延びる術である。その強さを持つことである。その強さをもって他者とともによりよく生きることである。羽田功先生が心と体と頭を使って教えてくれたこの術をどうやって次世代に，この社会に伝えていけばいいのか。私にはまだまだその野蛮さも高貴さも足りないような気がする。